

菅茶山会報

第5号
発行

菅茶山先生
遺芳顕彰会
1992年9月10日



菅茶山歌碑
(北川勇筆)

所在 神辺町下御領 国分寺門前
(岩川千年撮影)

訪ひ寄れば 袖も色濃くなりけり

籬の露の萩の花摺り 晋帥

温故創新

菅茶山先生遺芳顕彰会

会長 高橋 令之

古くから「温故知新」ということが口にされて来ている。最近では、「温故創新」と主張するひともいる。いずれにせよ、これらのごとばは一口に言って、過去の歴史を大切にすると共に未来に希望を求めて生きることの大切さを云わんとするものである。歴史をかみしめないで現在をあくせくと生き、また未来への展望をもたないで現実をさまようような味気ない生き方は慎まねばならない。

時代は、過去と現代と未来の構造をもって動いている。現代は過去と未来を結ぶ線上に位置づき、過去の影響を受けて存在し、更に未来の創造に向けての働きをもつものである。そしてまた、過去の歴史はその時代を生きた人々の働きによってつくられて来た。とりわけ何時の時代にも、いずれの社会にも職場にも、歴史を大きく動かした存在があるものである。時たま、時代社会の発展と共にその人の存在が高く評価されるいわゆる歴史的人物がいる。

わが郷土の偉人菅茶山先生は、正に歴史的人物として、当時廉塾を基点として備後一円に学問の波紋を大きく漂わせてこられたのみならず、全国各地からの数え切れない文人墨客が往来し茶山先生の教えを受け、学問に感動し深い感化を受けていった。またこれらの人々を通して、日本の学問も大きく発展し、日本の歴史も政治的にも大きく動かされていった。

われわれは、偉大な茶山先生の偉業に改め深い想いをいたし、輝かしい歴史と勝れた伝統をもつわが郷土に誇りをいただき、更に明日への明るい歴史を切り開いていく「温故創新」の意欲に燃えねばならない。